

字本音種

第七卷

農商務省  
和書圖  
第八  
號  
冊  
共

太政官文庫  
和書門  
八二四八  
冊架函號類

內閣文庫  
和書  
八三四八  
冊架函號類

內閣文庫	
番號	和 8248
冊數	4 ( 2 )
函號	183 233

耕種







草木育種卷之下目錄

以

稻

芋

九

りんごんさぎ十三

磯松

無花果

十八

波

蓮

胡枝子花

四

一船

四十五

薄荷

望江南

廿

むら

廿九

仁

薤

人參

廿

日

四十四

保

波菱

防風

廿

牡丹

廿二

酸漿

木瓜

廿

邊

絲瓜

紅花

廿五

十四





土 冬瓜 十四 番南瓜 十四 番椒 八漂注

玉蜀黍 二十 燈心草 世四 當歸 廿四

木賊 廿九 兔絲子 廿九 玉蘂花 四十九

茶 十八 甘露兒 十一 馬鈴薯 十

地黄 廿六

利 龍膽 廿五 林檎 十六

遠 敗醬 廿五 万年青 四十六 芍薬 四十七

和 草綿 世四 芍薬 八 黃連 廿五

加 蕪菁 七 芥 七 黃獨 九

冬葵 八 甘草 世 莪朮 廿四

烏頭 世 燕子花 四 萍蓬草 廿九

楨 世七 海紅 世六 槭樹 五十

與 薏苡仁 六

多 大豆 六 蘿蔔 七 蒼朮 七

蓼 八漂注 淡芭菰 二十 蘭蕉 四十四

澤瀉 廿九 百兩金 四十七

祀 建翹 世

曾 蠶豆 十三 蕎麥 六 火蕉 四十分

津 佛掌薯 九 躑躅 世七 山茶 世七

称 葱 八



奈

菘

七

茄

十

刀豆

十三

瞿麥

四

梨

十六

南燭

十九

良

幽蘭

四

落花生

二十

武

麥

五

紫草

廿五

梅

十五

字

字

六

鬱金

廿五

為

以見於遠見

欠

慈姑

十一

烏芋

十一

高良薑

廿五

栗

十六

香橙

十七

桑

廿三

枹

廿二

山柰

廿一

也

商陸

廿六

紫金牛

四

箭竹

廿四

楊梅

十八

末

甜瓜

十九

醬瓜

十三

鹹蓬

十二

硃砂根

四

竹蘭

四

江南竹

十四

苦竹

十四

松

廿三

楹梓

十七

蔓荊子

廿

茉莉

廿七

玫瑰

廿八

訃

罌子粟

六

不

效冬

八

匏

廿五

猷歲菊

四

入

風蘭

四

葡萄

十九

紫藤

四

木芙蓉

廿

扶桑

廿七

古

胡麻

六

蒟蒻

十一

五味子

三十

五木箱腫卷下

三



江

豌豆

十三

延胡索

廿五

藍菊

四十二

冬

廿九

天

天門冬

三十

鉄線蓮

四十

安

粟

五

赤小豆

六

藍

廿四

蜀葵

四十四

牽牛花

二十

紫羅蘭花

四十四

蘭蓀

四十三

龍舌草

廿二

杏

十五

左

豇豆

十三

甘蔗

十九

甘藷

九

櫻

四十一

獐耳細辛

四十一

蜀椒

十九

石櫛

十八

櫻

廿五

茶梅

廿八

山茱萸

廿三

仙人掌

四十九

山丹花

廿八

幾

黍

六

胡瓜

十四

菊

廿六

桔梗

廿五

金盞花

四十四

芍藥

廿七

龍骨木

四十九

金橘

十七

桐

廿三

金櫻子

三十

由

卷丹

十一

壺盧

十四

柚

十八

美

柑

十七

之

越瓜

十三

同蒿

七

萹

十二

芍藥

廿二

紫菀

廿

海州骨碎補

四十九

石楠

廿九

惠

江見

草休育種卷下

コ



比 稗 六ヲ 蒲蘆 世五ヲ 白芷 廿四

美人蕉 世少 頰桐 世七ヲ

毛 桃 十五ヲ 紅葉 四十九ヲ

世 仙人穀 十二ヲ 葛蒲 廿少 芍藥 廿四ヲ

石竹 四十九ヲ 剪紅紗花 四十九ヲ 千日紅 四十九ヲ

牡丹 八ヲ

持 西瓜 十九ヲ 水仙 四十九ヲ 李 十五ヲ

草木育種卷之下

東都 岩崎常正 編録

穀類 十一種

稲 藏玉集に菽草と名。粘るるを... 稗と云粘り... 人命のかる... 米ハ美濃を... 又尾張播磨遠江... 肥の品... 立夏の前後... 日を...







胡麻草木

黒ぶまの葉ハ又あり。蘭草ニ似たり。白ぶまハ又あり。葉小畑ノ背付也。灰汁小人糞をまぜ焼よく鬆へー○花鏡小云

種時忌西南風

蕎麥草木

信濃名産なり。野云又真云よきとあり。肥の土土地

小のり灰小人糞をまぜ用也。おの海新よ川なり。或云そそと

雑子の肉と同く合をへるむさく合あり。夏の上用あけてあり。

十日十日の間小葉を旬とす。至て早もいなり中も雨へー

嬰子栗草木

八月種と下し。灰人糞を産してまぜ焼なり。

又むざんそそを嬰子栗ニ似く小まのり肥も同し。○花鏡云

錦被花。未種前須糞地極肥。後以釜底烟煤拌撒用細泥蓋之。

可免蠅食

菜類

四十二種

蘿蔔草木

春夏の頃まろく或此云の圃と云く耕。灰小人

糞をまぜて入る切返し葉を採り川邊の南陸へ行地とけり

多り又紅蘿蔔あり。肉皮皆紅軟にして味よし

蕪菁草木

大根あり。けいも葉は下畑ハ涼く耕て種へー

又赤かぶあり。合をへるむさく合あり。夏の上用あけてあり

松草木

たうふ。夏中畑を耕し肥。並七月種下し。小便を

くまして多焼てよし。むろの海菜と考く。葉の上より焼てよし

霜月ニ丸あげて塩を漬るなり。○芸菫ハ八月前を芥菜とす。











芋八九十月皆掘あげ。山の日あつたよき崖と二三尺あつて掘  
てをうけあつて貯るべし

佛掌諸鎮江府志

四月はいもと切く切只灰と并山圃(穴を四

五寸掘土をうく葉とこころ。土(竹の葉とまよくま合せ合て植蔓

出て後根是人糞を入べし九十十月小掘あげたよきあり

黄獨鎮江府志

貯蓄するかまうむらごを四月は山知穴とて

四五寸一ツ掘るをよむけ肥をいれませ植べし

甘藷諸本

又塚球いもとも云降子により来り諸國小多武

務相摸上総安房等の砂地にて掘るの味は皮小赤とあるもの

上品なり。山にまて作るものハ形大なり味劣り赤とあるも砂

まかりなるハ根より四月甘藷を種とせしむ。葉ハ蕺菜の如く  
臭熟る。葉ハ紅色なり。葉と搗バ白汁出蔓二三尺あれば曲く  
地ハ穴を穿て延き存ぬ。皮をむく。葉のあり根とせしむ。  
甘藷と多。肥を用む。○生あつ根瓜摺て水蒸し。葛を揉べし。  
上品なり。根を煮て焼成煮て食り。糧を助肥を利する。人  
民用小葉あり。又小兒食て大便を和あす虫を生かせ。又疳病は  
常正按とす。砂糖の甘味ハ腹中入て變ぜらる。大人小兒とも虫  
積滞満不ぬ。甘藷の甘味ハ腹中入て苦味も受らる。大人小兒の腹  
中。粥和とす。ハ灰と煮ても性粘滑なり。食ハ停滯し。女  
馬鈴薯松溪府志 せうりいも又をせしむ。又あらんどのもとを云。變



名カイトーヌ 重墨利。ヤフルキト同。ともいふ。葉の菊ふ似て大なり。

根に塊ありて黄獨小似く鬚多。皮蒸してぬり赤くあり。焼

又蒸て食べ。種ふは四月以降の肥地へ種人糞を澆ては

十月根系掘採。種ふは四月以降の肥地へ種人糞を澆ては

掘埋置。春の末より出して種べし

二月に代の内へ種をまき。まき後肥をうて四方を圍

置六暖ゆて又多をも防む。生て二三寸ありて畑に種べし。圃

二年のあまほを種とらふ。肥地へ種の中人糞を入耕を種付

○茄いれを煮ておくを此い合を下。るま漬又ハ焼くはとる毒あり

多々今急ぐを必痰飲を生じ。又瘡家小患。婦人下胎の病。又小兒の控下り。五疳驚風を生ず。大人も多食。腹中小寒湿を貯て。終に脾胃と接し。痢病腹痛。此は諸病小忌て。毒あると舉て散べし。然といふも世人常小食。右田舎の多作。生を種り。茄ハ價賤し。て久く貯り。小走。又毒業。小あま。いと云。茄も味あま。あり。

卷丹 鬼ゆりハ花紅色なり。花の白ハ百合科。引て葉よ入

下。食料のゆりハ真ちあ。細き砂より。たる地を。耕し

あま肉。久。砂糖を。切ませ。金種。用。灰人糞。と。切ませ。壘て。種べし。

雞屎と用てむ。よ。葉の。乃。又。生。と。る。寒。瓜。と。り。ち。く。よ。せ。貯。置。ま。



穂一兔の少梢と一尺餘も摘切ハ根又突入シ

甘露見

世その湿地小豆一盃洗汁人糞を焼て下九

月以根を採り洗熱湯をうけて皆油味噌を不浸て食

一

葯菟

上端少多此也。是も茄と同一年種ハ根

荒さる一二年体と畑で種ハと○春の末葉先

秋を生きて筒の形中て長く肉より根の根をのめを出す

青し後葉瓜生す。虎虎掌小似く葉の散る種ハ山畑の

日法より根り之細き茎を入春灰人糞を用いし

掘ハ根大なる傍又小豆子と生きて是を分種す

鹹蓬

砂真土小宜し。春彼岸小種瓜為魚洗汁焼

又海を小自せるとるをまするハ低して地は延○岡水松ハ

又陸部少とも云形状淡より多似く葉冬して肥より葉と採

砂小ませるとるを小看るも下葉て葉と厚し又吸おし用て味

仙人穀

文化丙子年初く多々種莧の類々葉の彼岸小種

前人糞汁炙洗汁生るを焼へ。葉ハ鳳来紅小似く茎ハ雞冠

似る。秋小むて長種を生きて形莧小似く下又虫と足解

葉を採菜とたり。又葉の熟りたるを採揉て吹火おてあふね

ちせたるを罌粟を用いどく小諸の菜へ振うけて食ハ甚香

蓮

秘傳花鏡曰菜餅或麻餅屑鹽又藕枝頭向南以猪毛

草木部



少許安在節間一云取酒甕頭泥種。田小他干編を月を

根大少して乾る。味甚美あり。ゆちむすといふ盆栽の泥の中

田他を交とさしてて。冬ハ地へ種とも小埋也。一実種ハ穀の

内の肉よりとる。根小支は別して漬あり。浸葉を生て泥へ種。一白

蓮。紅系蓮。朝日蓮。牡丹蓮。等あり。大抵同一に入てり。

慈姑草 下慈より種。ひを土を形。少之れを三四月田邊の

中へも肥を月ひき。若用。五六干編より。

烏芋草 不澤池或沼の浅水種。種てり。葉ハ姓ハ葉小似と

々。根ハ慈姑小似と硬く。葉ハ十月小堀採生。て合。一

尊草 和名ぬるりといふ。古き池。小く生。葉ハ蓮小似と小く

切込ちり。葉の中小莖あり。その内莖不ろをへり。つよき肥ハ  
魚池。ても水濁て腐た。ふよてハ生。種。一水漬と。種。葉る  
池。種。より。

豇豆草 長さげ。知。げ。あり。何のふ。と。より。湿地。

魚。三日月にま。げ。肥を引。込。て。種。一。種。後。灰。汁。人

糞。汁。焼。て。り。又。代。一。種。と。種。一。種。す。も。り。

隠元草 白。と。あり。馬。を。あり。種。一。種。あり。種。よ。り。種。一。種。あり。て

日。陽。の。地。種。竹。を。種。種。一。種。根。一。種。洗。汁。人。糞。汁。を。焼。て。

又。み。六。月。種。を。種。ハ。秋。の。末。まで。実。あり。

豌豆草 砂。真。土。より。秋。彼。岸。茶。又。種。を。種。一。種。人。糞。汁。を。焼。て。

草木部 蓮 卷下



用くより。大抵蚕豆の身入りてより

蠶豆 草 砂真土より。七月種を蒔き中灰と人糞又干糞

筆をよせ根は洗下

刀豆 草 二月種瓜代の内、蒔きやげ肥を入れて畑(穴)を掘り

種を蒔き、灰と人糞とよせ焼てより

越瓜 草 三四月代に種を蒔き苗一才程ふりたる圃(二三日

四方を瓜おろしやがけ肥を入れて種へ、夏中人糞小溝の水を

よせ焼べし又苗と種を干糞を粉して砂へよせ瓜へよせ

星 草 星は口寄りの人糞を種へよせ

将西瓜 草 大抵越瓜の身入り同し

胡瓜 草 種を畑を中人糞小溝泥をよせ入てよく耕し種

四月種を蒔くより。又干糞を砂へよせ種へよせ瓜へよせ

冬瓜 草 代(蒔き)を二三日方も瓜を圃(穴)を掘りやがけとも不

種を蒔き後人糞と藁葉をよせ各々根は洗汁を焼てはし

番南瓜 草 やげ肥を入れて蒔き人糞藁葉を種へよせ

か行ちよも入八月一〇番南瓜を多他藁と種へ。法は藁粉と種と

同じ先ごろるすを擦りて水を生きて撈滓と搾りよめ瓜澆とよめ

度してよめ瓜水と種へよめ藁粉の丁くよめるあり。味もよめ

壺盧 草 四月初種を代へ蒔きやがけ肥を入れて星へ種へ棚を

蒔くよめ纏りてよめ



絲瓜ヘシカ 四月しがつ初はつ種たね瓜うり有あ竹たけをを流なが纏まとしむ。人ひと糞ふん奥おく洗せん汁じゅう溝こうの泥どろ

をを根ね是こゝろ燒やべし。魚いしもも少すく味あじ味あじをを竹たけをを燒やてて食くべし。又また人ひと糞ふんをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。又また人ひと糞ふんをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。

又また葉はもも茶ちや毛もう皆みな移うつりり用もちももし。又また八はち月げつ十五じゅうご夜やふふちち上う一いち尺せき竹たけ切きれれをを陶たう器きへへ入いれれ切きれれのの氷こおり漬ひきき又また痰たん嗽そうのの汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。

江南竹こなんたけ 八はち間ま 又また雪ゆき竹たけとともも本ほん暖ぬく國くにのの産うりり今いま不ふ種たね甚し多たく

笋たけのこをを生せい子ことと根ねめめ之の粉こな糞ふんをを多おほくく入いれれししてて竹たけをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。又また人ひと糞ふんをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。

十じゅう二に日にちをを竹たけ碎くだりりととふふ日にち不ふ種たね極ごく小せうくく活くわるる竹たけをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。

花鏡曰はなかがみいわく竹園たけのう宜よろ用もち大麥おほむぎ糠ぬか或ある稻いね穂ほ漆うるし河か泥どろ壅おん又また死し猫ねこ

引ひ他た人ひと竹たけ○まる抄しやう林りんのの乃の人ひと植うちちととああ竹たけ長ながくくののびび又また雪ゆき打うちちをを少すくし。又また竹たけのの根ねりりとと葉はをを垂たげげ根ね腐くりりののりり。馬うま糞ふん糞ふん糞ふんハハ多おほくく入いれれししてて竹たけをを接つ木ぎ切きれれをを金かね糞ふん汁じゅう出でるるをを糞ふんにに煮ゆべし。又また正月しょうげつ之の日にち二月にがつ二に日にち三月さんがつ三さん日にち植うちちててももし。又また冬ふゆ月げつハハ色いろしし材ざい小せう用もちるるハハ八はち月げつ小せう切きババ竹たけ実みしてして虫むし也なり。

果類 二十五種

杏あん 桃もも砧しん又また李り砧しん小せう接つ木ぎ切きれれ。樹きハハふふんんとと梅うめももくく似にたたるる。花はな草くさ也なり。

紅こう。又また八はち月げつととああるる。接つ木ぎ切きれれ移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。

梅うめ 草木くさき 冬ふゆ中なか根ね口くちをを掘ほりり人ひと糞ふんとと入いれれてて糞ふん多おほくく入いれれししてて二に月げつ初はつ種たね砧しん接つ木ぎ切きれれ。

後のち法はふハハ上うへ也なり。又また十じゅう二に月げつ小せう接つ木ぎ切きれれ移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。

又また十じゅう二に月げつ小せう接つ木ぎ切きれれ移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。又また春はる分ぶん移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。

又また春はる分ぶん移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。又また春はる分ぶん移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。

又また春はる分ぶん移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。又また春はる分ぶん移うつりり樹き肥こけけ皆みな樹きとと同おなじじ。







林檎

江戸下谷本所産の土地お應せり。根をよーきく  
種く、湿氣を透べし山の冊赤土皆取。春の彼岸小海紅の石へ  
接べしむきろ接しひ接ともふより。又海棠の根を接し、硝ふし  
接をよし。九月小植せしより。十月迄より小本ハ近ら。又本ハ  
根を掘根芝の知子示ハ切らし。冬中腐る人糞を焼べし  
三四月の比多虫を生ず。其より生じて養分合少く。果を  
かくるをよくえべし。又梢又籜の如き卵ありて。流の赤毛むしとる。  
燈油を炙く。又接べし。二三月比古枝を伐き。種樹書曰。林  
檜蛙以鐵線尋竅内鑽刺。用百部杉木丁塞之。如生毛蟲。以魚  
腥水潑根。或埋蚕蛾於地下。

楡

葉も花も林檎に似たり。實ハ楡植し似く園にて毛  
あり。根よりまろ小科を生ずる力の是を伐きて種べし。利本と  
掘ふと。風小く振落す。肥ハ梨と同し。秋熟しと黄  
色なる。何接し。熟灰入。焙食べし。又生少く。薄切。壓石とて  
汁を搾せし。砂糖漬てし。又砂糖より煮る。菓子に他へ  
種。乾き多し。蟹と同食べし。種と種ね多し。波かここと  
ちのりあり。春彼岸より。日向。種を播く。淡柿の石へ接べし。さ  
草小く。堅く。巻べし。冬中根を掘腐る人糞を入べし。又獸肉皮  
あど埋もり。種多し。九月より。六月土用中に一度肥を  
種ふ。多し。実落む。

林檎

種



香橙きやうてい 九ノ月四國紀伊等の暖地ぬるまじ 小くハ実を焼キ布ぬい 振ふる

肥あか 土つち 灰はい をよせまへ又獸肉いむもの とよく腐くさ して入いれ ころし。七月

肥あか をころすと虫むし と生な ずると花鏡はなまが 又月つき ころす。百五ひゃくご 年ねん まで入いれ ころし。二月

以もつ よび接栽せつさい ハ切き つぎふしてよく活い ぶさる。む砧いし ハ皆みな 拘棘くわくせき 二接ふ ての

柑かん 本ほん 紀伊國名産きのくにのなまはた あり又有田ありの の産う る。柑かん 橘たち の於お 暖ぬる

國くに 小こ 亦また 土つち 小こ あり。二三月ふたつきさんがつ の以もつ 抽ひ 接せ ての。又拘棘くわくせき の砧いし 接せ ぶ。

吾われ 申まを 人糞ひとふん 又獸肉いむもの 等ら 根ね 足あ 入い ころし。柑橘かんきつ 於お 七月しちがつ 肥あか と焼や ぶ。

米泔水まいせんすい を洗せん ハ実み 腐くさ ぶ。柑橘かんきつ 乾か を貯たくわ ぶ。绿豆めいとう の肉にく 納い る。ま

ちぶをりべいと花鏡はなまが 小こ ころし。

金橘きんきつ 本ほん 山の赤土やまのあかつち 母はは 土つち 小こ あり。冬ふゆ 中なか 人糞ひとふん 獸肉いむもの 等ら 根ね 足あ 入い ころし。

より。盆ひら 小こ 植う ころし。三月さんがつ 以もつ 極たぎ 移うつ せよ。砧いし ハ拘棘くわくせき ハ接せ ぶ。○金糞きんふん 也なり

柚ゆ 本ほん 赤土あか 母はは 土つち 小こ あり。二三月ふたつきさんがつ 以もつ 拘棘くわくせき の砧いし 接せ ぶ。冬ふゆ 中なか 灰人はいにん

糞ふん を根ね 足あ 入い ころし。又獸肉いむもの とハ実み 多おほ 。

無花果むげか 本ほん 葉は と古枝ふるえだ と切き ころし。冬ふゆ 中なか 人糞ひとふん を焼や ぶ。又三月さんがつ 以もつ

勢いきほ よき枝えだ を切き ころし。地ち 小こ 押お 水みづ とお。灌かん 後ご 人糞ひとふん を焼や ぶ。年とし 菜さい と

結むす ぶ。冬ふゆ 中なか あり。

揚梅やまわり 本ほん 実み ハ蛇毒へびどく 小こ 似に たり。極たぎ 小こ あり。冬ふゆ 中なか 生な ず。山の暖地やまのぬるまじ 小こ あり。

初はつ の冬ふゆ 中なか 柵しやく の下した 冬ふゆ を拵しな 落お ぶ。大木おほき 小こ あり。冬ふゆ 中なか 青あお の葉は 小こ

似に たり。冬ふゆ 中なか 柵しやく 足あ 入い ころし。灰人糞はいにんふん を焼や ぶ。

道みち 本ほん 十八



石播草

花小紅あり。ハシマあり。綵瀬ハ花の圍白し。又白花の  
ものあり。惣とく二月枝を管小切し、挿ハよく活りのあり。又蔓の

被岸小よびつぎありしは、を并根足人糞を入ハ苑実多し。

茶草

葉上僧正入宗して、重て移を後日し、作り始て後ふのふと  
葉原翁云、本邦喫茶ハ榮西上人より盛不れりと云、活すハ

上品の力のハ二四月に、蔓の芽、何麻布の敷ふ、

圃中以下の葉ハ蘆簾ふく圃と云、種をくみ、或赤土あき、

糞をくみ、根足多し。又米泔水もくみ、

油糟ハ糞酒

蜀椒草

朝倉山椒あり。山云より。冬寒瓜府ハ蔓生、于縞  
溝泥等、れり。人糞を意。又刺あり。山椒あり。樹小、刺は

又常のこせうハ蔓く、実を結す。表皮を樹の皮を堅く

剥て、少くハ種一、皮あり。

葡萄草

甲斐少く、蔓れり。江戸ハ蔓と、紫葡萄ハ実ハ氷晶  
葡萄ハ実青緑して味甘し。棚を括て蔓を栽べ。三月以枝を

切挿バよく活る。又鉢の穴より蔓を引ぬ。挿入を入、秋又

おと仲人糞又酒粕を指足入す。花後又枝の糞を用り、

甜瓜草

本。美濃四真桑村より、おのの上、右ノ名と云。江戸



西瓜 瓜 常陸砂山に産下総安房等の砂地には三月末種を  
前干編を剥烟白く挽粉にして人糞とせ又瓜を煮て  
烟(定)を掘その星を種にする。又瓜を煮て一丸種を  
煮る。又瓜を肥ふ。是小見ゆ。昔人糞汁海泥をこぼして  
又白西瓜あり外皮淡緑くして臆白味又甘し

西瓜

甘藷 本 海をの砂真土に種す。三年用をこる茎を二節節に  
切。芽のふを接ふ。一足ふ。一丸種して多洗汁をこる。俵に  
生むる小科を切るべし。秋よむて茎汁の燻たる毎切採て搾す

と汁瓜採葉蛤粉を入涼し。白砂糖とある。是を又を焼の  
甕ふ入二葉して下は湯りの白砂糖あり。扱切採とこあま  
たかかして実する茎と撰。末年の種は貯べし。そ茎を破入  
日陽よむる。地を掘埋。土をこむて掘い。右の如く種す。

甘藷

物類品騰小園あり考べし

落花生 典籍 香芋 花とも云和名 其の又長崎をあんさん  
まめといふ。紀伊國少く多化。神志。是が小砂まらうの山畑少て  
陽地(種べし)。冬中畑(灰人糞をよせ耕。並別代を播。落花  
生)の葉を割て。夏むらう漬く種。葉を生しく畑へ種べし。お庭の地  
るねば畑へまらう為付てし。種る園(扱煉を切。せ。壘。まらう)。

落花生

種不備種















乳粉と硫黄とを末し。根を掘用て周圍を築べし。米を花盛なり。  
牡丹道知まよし小科を白子と名く分種べしと云

黄連

加賀菊葉の黄連上品なり。又薩摩の大葉ハ菊葉。

似く甚大なり。葉亦し品多し。葉又入る。又竹葉の物に類あり。  
蝦夷の竹葉ハもて細く青品あり。又五加葉あり。以て又二葉のみの  
あり。青品さあり。比るに根小し。葉又用る。不堪む。惣て種。法ハ  
大抵人參を種ると同じ。土地ハ多分く竹葉をふり。日陰の地ハ  
宜し。若日陽あり。竹ハ蘆の葉と編日陰しては。五加葉のるあり  
か。よくもより。湿地と煙。肥。及。を。打。く。米。泔。水。と。焼。べ。し。八月分  
種。随。分。を。通。く。種。く。か。り。

防風

是ハ葉又入る。料理又用る。あうと云あり。防風ハ

享保年中漢程液今多し。山畑の畔云原さ地は種べし。去種を  
蒔あり。又舊根と種る。五六三月より。竹をて穴と深くあけし。入て

ち。瓜。葉。ふ。す。へ。し。む。畑。を。中。に。肥。ま。す。

當歸

二月種を蒔。人糞とあけ用。三年よりて花あり。葉を

採。盡。べ。し。土地ハ牛房など種る。ちよて。亦。ち。竹。を。小。細。ある。砂。ま。り。り  
たる地は宜し。寒中。人糞。少。用。よ。利。て。さ。し。二月。種。ま。す。より。五。か。寸  
る。紙。あ。ひ。く。種。梅。の。後。人糞。と。焼。べ。し。十月。十一月。種。を。掘。採。米  
泔。水。と。あ。ひ。く。し。土。を。去。毎。日。小。乾。壺。入。て。貯。べ。し。湯。入。て。于。バ  
性。味。性。く。ち。の。る。あり。



白芷

延喜式より云く山城より多作り出せり。其の地

地人妻の彼者子種を養ふ。種く二年目の十月根を掘採。其の根

白芷當帰獨活防風防葵の根等三年めよ其根を花実あわ

根室を少あうなり

芳藟

蜀の川物より出づ。其上品と云く。川芳と名く。本邦より

通じてせんきうと云く。寛永年中長崎より種来と云く。大和古井より

多作り。其の山あそく肥地より。冬中人糞と入耕。毎二

三月小種より。昔より夏より秋よその内候と肥入。入る。

十月末より種く。細根を去天ある塊を乾して。葉入。用なり。

栽茂

漢種のみ。二種あり。形状爵金にして。其の中より葉を

此根冷赤し。接するこれ真の栽木あり。一接官園より種来。其

紫色を多く。根黄色あり。然ども爵金と其味少く異あり。此真の

薑黄あり栽木より種く。此赤土也。云々より。人根草を種く

如く。其より。夏も冬も人糞を漬べ。一月以後掘り。乾して。葉を

入る。又よくある。其根を来年の種より種く。む子を裁ぬ。種は

佃を切。種は其のよふて。南に向く山の崖北日あたりの地を

四人掘て。根を埋。其に客井傷と云く。日月入る。掘り。乾根を

挿す。瓜種より

鬱金

葉ハ蘘荷より似く。洞の花を種く。色白く。根ハ芋より似て

長く。其色より。山知の種より。冬井根瓜。其を栽木の根。葉より用



高良薑

葉六葉荷小似く多く入る。根と葉并人糞を

洗十月中以より唐むろ入べし。暖地中ふち入る。入るより

くまなけらしの一敷ふ。火少く低して花白きものあり。是牡丹若なり。

燕み花の下小鮮なり

桔梗

花は碧色。白色。とも小重瓣あり。又後あり。其の被宿子

種瓜蒴あり。根は二月十月より。おふ人糞夏は多洗汁洗てより

龍膽

山の崖ありふあり。根は赤を粘ある。世に小は米泔

水と洗。亦の肥ハ也

延胡索

漢種のものハ牡丹葉と云ふ。葉牡丹小似く小なり。根

圓零餘子のごとく。小く美色あり。又尾張國より来るものハ三葉の

地黄

延喜式にさ名ひめといふ。山城大和筑紫ふく美紀吉野

紅花のあり。美色のあり。竹も十月根を掘採。鮮する。日陽

よき地より。金日月より。根瓜蒴三寸。掘切。赤く。加ふ。り。たる

肥地。栽べし。を。人糞。入。耕。曝。置。栽。後。根。足。鹿。の











望江南 救荒本草

又蛇滅門草と云。藤原より来る。薩摩、後河内、夏

安房名の暖地より。冬、水より生ずる。日月移る。有る。形状

馬蹄、決明、小似。つら。寒風、結ぶ。連し。葉、薄。實、のり。む。瓜、採

中、初、の里、を、夏、後、夏、并、の、葉、洗、汁、人、糞、糞、を、灌。十月、以、之、

厚、ひろ、入、釜、ハ、よく、実、入、る。そ、幹、枯、す、て、葉、よ、む、て、芽、を、生、す

商陸 本草

何處、地、中、を、よく、生、す。肥、及、む、と、實、瓜、形、す、も、よ、く

生、す。根、大、く、し、て、数、は、括、む、葉、瓜、採、も、よ、て、搗、切、蒸、と、る、と、一、滲、

ふ、と、は、苦、あ、る、と、也。根、水、腫、を、治、す

菖蒲 本草

種類、數十、品、あり。澤、六、西、湖、の、邊、に、生、ず、る、は、船、來、り

長、形、本、邦、の、石、菖、子、變、と、す。又、有、栖、川、と、云、瓜、葉、の、先、皆、上、は、向

あ、は、漢、抄、あり、と、云、又、堅、く、美、色、の、筋、あり、瓜、葉、令、又、虎、の、巻、あ、る、と

云、又、葉、の、面、白、く、背、ま、ま、瓜、晝、夜、と、云、そ、外、高、麗、雞、尾、も、ま、ま、の、

又、兩、根、と、稱、す、も、は、根、の、兩、面、より、鬚、根、瓜、生、ず、る、を、云、常、は、石

菖、も、ま、ま、子、并、み、自、然、に、兩、根、あり、た、る、も、は、あり、又、五、根、と、稱、す

法、あり、常、の、石、菖、は、皆、根、の、腹、より、鬚、瓜、生、ず、る、片、根、ある、を、以、て、

善、と、鬚、を、剪、て、根、を、う、り、を、堅、く、起、く、極、金、バ、あ、方、より、根、瓜、生、ず、る

を、云、然、も、ま、も、久、く、極、金、用、又、常、の、ごと、く、片、根、よ、込、る、又、石、菖、を、

石、よ、着、る、も、久、く、葉、を、剪、て、根、瓜、石、添、く。細、き、針、金、小、く、ま、う、と、し、ま、う、

絶、を、水、を、灌、と、る、鬚、根、皆、石、よ、着、ゆ、れ、之、を、洗、曰、用、糞、蟬、蝠、屎

を、水、よ、和、一、燒、ハ、葉、と、り、入、



木賊さくさ 草本 砂真さごま 山のつらの母はは馬うまがくると悪あ。油あぶら糟くわ灸し洗せん汁じゆ等

溝みぞくより米こめ泔がら水みづをあれし焼やくもあり八月はつが分ぶん種たね一いち

萍蓬草へいほうそう 草本 廣ひろ池いけ小こ種たねくる肥こぼ及およむを金かね子こ栽うるを干ひ韞いんを

用もちてより又また葉は頗おほ小こくて花はな紅あか色いろと帯おび子これを紅あかくしるを花はな

又また細こ葉はのちはあり又また以もて川骨がほ苗なえ少すく葉はの形馬うま蹄ひ似にく園一いち花は

皆みな同どう一いち

澤瀉たくしや 草本 和に名なさらおのたらと云い澤たく種たねのちはハ葉は園えん一いち慈じ姑こ孫そん

種たね同どう池いけ沢たく等ら小こ種たね五ご六ろく肥こぼ及およむを葉はを種たねくる水みづ地ちへは二に日にち

比ひ麻ま生せいと後泥どろの中なかは後種たね一いち

兔絲子うゑご 草本 和に名な稱せう一いちちちとり又また日にち光こう尾び尾び早はや稻いね田でん本ほん所しよを

稀うまは在所しよあり新あらた本ほんありくりよるある妙又また生せいむる之の種たね又また纏むすむる後のちは本の上うへままと種根ね拍はくる一いち秋あき実み瓜うり種たね又また埋うめる也なり二に日にち以もて知しる灌かん本ほんありてりよるある妙又また生せいむる之の種たね又また纏むすむる天門冬てんもんとう 草本 葉は六む拍はくる似にくる有ありす花はなくると云い蔓つる長ながくして本ほん竹たけを纏むすむる又また特とく生せいのちはあり苗なえ小こ一いち根ね母はは指さしのちはく長ながく湯をゆく分と皮かわと去いれて煮にくる葉は又また入いれて又また壓おする自みづか然じ汁じゆと榨しぼきて砂すな種たね又また煮にくる蜜みつに漬ける種たね又また山やま知ちと深耕かきて去いれて種たね又また人ひと糞ふんをまくる九く十じゅう月つき小こ掘ほ採とり

五味子ごみず 草本 武ぶ蓋がい下げ地ち甲か斐はい等らの山やま中なか小こありの葉は又また拍はくる嗅かハハ松しょうの

香かほある又また松しょうふさ松しょうぶぶと云是こ北きた五味子ごみずと云葉は又また入いれて煮にくる



又朝鮮五味子あり南五味子ハさ糸久ふと云下品ありと著し金  
山の法地ニ植へし蔓太る且肥及不と初ハ酒粕人著其葉瓜  
べし蔓をたうめて瓜け金瓜を生ず是を切し瓜種一  
金櫻子 葉ハ野薔薇又崖椒ニ似たり花五瓣少々淡紅あり  
実ハ指頭の大なり刺多し漢渡の金櫻子と全同し二月日月  
枝と挿バよく活し又山椒むらもはれぬとも夏実を結す備急本草の  
金櫻子の圖ハるふハいと少似たり

牽牛 葉ハ入江白の二種瓜用李氏本草綱目小丁香茄  
苗 數片 白牽牛しすハ根あり一白牽牛ハ葉ハあさが何の  
中より種の色白くはあり追に江戸大坂まで多植し以種類多し悉

拳小味あり花の色ハ碧色ハ常品あり紫淡黄紅又浅青小紺此  
堅筋あり花あり又白して筒の紅きあり又花瓣切たりあり又切じて  
縮こるあり又花切と瓣多ありと乱獅子と名く又花の筒より細長  
花瓣生瓜孔雀と名く又八重あり筒を結ぶるゆは糸索と云  
又葉の形変りあり葉小く厚縮たる瓜字津川と名く又葉黄緑  
色ありと緑斑あるものを松島と名く又葉細長と柳の如きもの  
あり又絲瓜の葉又似たりはあり又数葉の莖皆等し是て莖扁く  
なる枝ありて花多開けはあり是ハ石下ありその餘二百餘種あり  
烏頭 本 草 毒強し又蝦夷附子あり花深碧色あり又倍々川烏頭と名くその  
毒強し



あり葉大なりと掌の如根長して三寸にあり疣あり又上縁は白花の  
葉のあり上品あり以物を多栽て附子を製す之根の形圓くと長く  
末尖まり根九月又掘採一本又二口の子を牛糞と製法又念を入  
登し種を地へ出さよ。芋外種を如くとは。女木陰に宜肥地をね  
肥ふ及むん

連翹

本草 女中根之人糞酒粕等入とよ。根中にして枝を  
管又切く水又浸て挿ばく活をめむ山を宜し

蔓荆子

本草 相摸國海を小けす小木あり。葉圓花紫中て小く  
実の南燭の大ききなり。是を糞に用于婦人糞を冬と夏とも用てよ。

二月枝を管又切く挿す水と水を灌べ

山梔子

本草 山の湿地真土をねがきく人糞を葉  
子の用又葉を入用もはあり。三日月枝を挿べ。名花譜云

花あり樹挿ハ活也

山菜萹

本草 信小さんさうと云。二月に小なる若色の花攢簇て  
圓き形をなす。若くは花を用ゆ。漢種ハ官園にあり。紅き実を結形状

胡頹子の如く六味丸八味丸をの補劑ハ小木の樹ハ人糞を用て育  
生むせしむ。大樹に育まば肥及むと

抱杞

本草 二挿あり葉小多き。枸棘少く刺あり。葉入る木の  
抱杞を用べ。真のく只刺あり。実圓して長うす。紅く熟したるは

採る。日小乾酒に浸焙細末とる。砂糖を入朝夕用て之補す。



老人虚人用ての。又葉を採煎貯て薬に用べし。枸杞二月

木瓜

木瓜 木 花 紅い。三月接ぎ。寒中二三度も挿し人糞

灌バ花実多し。又狗の糞瓜用ると花鏡小貝入り。

龍舌草

龍舌草 臺灣 油葱 嶺南 とも云て 脂液を本草小蘆薈といふ。

阿蘭陀

阿蘭陀の産あり。本邦には芙蓉花と混

尾に似たり。夏秋二夜花咲く。花の葉には尺あり。根より生る

小科を分極し。夏平人糞臭洗汁をどまき。焼てし。む盆

栽る。根を去り。肉焼べし。湿る。根を去り。肉焼べし。湿る。根を去り。肉焼べし。湿る。

桑

桑 葉の圓き。瓜白桑といふ。又葉圓して大さく。又むらう。あるあり。

桐

桐 木の葉の實の圓く。角てく。葉の實の圓く。角てく。葉の實の圓く。角てく。

活りたり。或は桑木を屋材とする。桑木を屋材とする。桑木を屋材とする。

乾めり。妙に秋実瓜をく。葉は角てく。葉の實の圓く。角てく。葉の實の圓く。角てく。







燈心草 本 地澤の至不極或は田小極多あり。此草は瓢をなす。

燈心草 本 燈心八蛭蝸の外小入又葉に用ひる者多く席と織る者道江席と云々此草小細して短きもの瓜あひげと云。是を織る者席を備後席といふ短し人井ふく継あり。皆肥ハ雞屎を糞一とまると又茎を于緇

藍 草 蓼藍松藍の二種あり。本邦少く用ひる者蓼藍之葉を

又二種あり。形葉蓼少く圓一。又長きものあり。とを小冊云又云云小あり。葉分は種瓜蒴干緇人糞を糞用てあり。百多あり秋あり一葉の葉。之を川あり。揉く乾し砂泥の中へ洗す深お小用ひ

紅藍花 草 秋分小葉瓜蒴灰汁人糞汁を瓜蒴干と燒ては直云あり。冬瓜蒴を糞あめて乾あり。よ朔に花を搥て云ありて

燕脂と製するあり。あふとまつむるあり。

紫草 陸奥南部より出るの上品あり。根瓜蒴をのれ月と日。灰汁干緇を糞用てあり。花鏡曰忌

人溺及驢馬糞並烟氣能令色黧

匍蘆 草 十ありひようたんハかたより小くく

拍切ようたんハ柄去しくひちやくに他く



















南燭草

実小紅きあり白きあり。日陰は植む旭少くあり。

此云又馬毛に植べし。本汁水紙灌根か茶滓をまべし。勢よくわらぶ。

実糸結てもおせす。南天竹人家より植む火災防と花鏡ふくじ。

百楠草

日光山中禅寺湖水の傍に。高き一丈餘の大樹あり。

又大峯石楠ハ葉細長し花ハ白く又ひあ石楠ハ形状小く

葉木のどろし。是ハ石楠の影小形白あり砂と赤ちる葉のみ合を

植べし。四月八月に枝へ玉珠を挿し挿は活する。人糞よまらうかす。

米泔水又油糟等みかしの用をよし。

えんじだ

挿あ中に枝状切し赤を挿べし。干鰯人糞を用

てよし。葉も紙張るゆへに暖地小盆。又むらへべし。挿花不用し。

紫藤草

攝津國野田の藤ハ長さ四尺五分常の母さふとく

列る。又花大ゆて短毛のあり。又白ふあり。又ち用ふハ葉も

花も小し。三月にきり接みてよし。又根紙掘採く砂とまらむは

人糞小酒粕をまぜ根足へ入る。夏中細長き蔓をまきと死

その蔓糸刈べし。

鉄線蓮鏡花

山の母さよう酒粕人糞糸入てよし。枝を伏てお紙

を紙根紙生じてお植べし。棚を三尺ぐい小低括ては又花白て

千葉ふるものものをゆれおとす。又かぎぐらまの碧色ありて花大

あり

玉薬花鏡花

長條あり。お紙んかたどら。享保年中漢土より



来ると地錦抄小貝入たり。以物室を以て。庭むろ入ると。八月  
以蔓を切とさ。或ハとりあうて三月月小分挿ては。金巻を弄べ

磯松

薩摩琉球等の海をなす小生手と幹小鱗甲ありて葉

鉄のじく。細くて枝あり。葉尖懼麥小似と園。秋の万葉のろの

花少り。形状様小似と小。移種ハ因ハ括易い。花を挿すと赤

く小白ゆるゆ。砂を盆のふに合色種と。文蛤蛤蜊を赤碎中のみ

浸し。種ハ苗ハ八法ハ。或ハ招治てハ井のぬ。清水等を

そぎ。種ハ挿けるもよく。葉を

水仙

農業全書の拙法ハ夏中招の塊を掘出して日小乾人葉

汁小浸。又採出して日小乾と三交をうて。地ハ挿るといハ。花

鏡の法も是ハ仙たり。水仙ハ安房國小多。山々早く花をひく。  
盆小挿るとハ花咲が。地ハ七月以根を掘と。酒粕馬  
糞人糞と手のせ合入てよく。土を踏付け。夏中をなを灌とす。

花鏡云。七月猪尿和泥種

猷歲菊

又雪蓮 西域聞 ともいふ。蝦夷とてハ。コトトといハ。

山小多生す。一尺餘ありて花大なり。又油美福素の葉の。莖緑色

とく花は淡紫なり。又重瓣ありと白あり。形状ハ葉の如く。是ハ

花開とす。山の重なる小種也。盆栽ハ花少。花の耐ハ木葉を扱て

よ。夏の肉米油水瓜根具灌少。油糟を弄もよ。

樟耳細辛

又とす。手とさうともいふ。加賀國白



山雨多あり。白花の中は多し。又淡紅あり。又落葉もあり。深碧色深  
 紅色の中は稀あり。夏六月陰中く夏八月陽よき。山の北はく妙云  
 坐其地ふ種べし。花八月小開く。夏八月除く。夏八月はつ  
 米汁水を灌べし。人糞も好し。

風蘭花 西園小多し。檜柏又加條木多し。生樹の枝幹へ着。撥  
 桐の毛をとりて結つ子。皮を撥を纏。撥のあり。又つて是を社  
 生は右護蘭も同じ。

櫻草 種類多し。悉拳小暇あり。大抵正色なく。土五種。下谷  
 まの遠北あげはち。曝し銀し。細小條なる。五種。そのありを  
 入て合せ。はち二月初小種を種べし。一説小馬糞あり。

澆花多し。と云。山あり。肥さるる。善くありて。花の莖長く。且少し。一  
 不挿あり。又ゆきうらうらあり。小くくると云。日光少あり。善く小く  
 花も頗小し。淡紅し。又河内蘭花。小くあり。さうさうあり。と云。か

瞿麥 木 入和るでし。六月ふし。花は淡紅し。又薩摩乃。花の  
 ろ。下し。洛陽花といふ。花を大りて。さうさうあり。之はす。ふ。ふ。ふ。  
 あり。花辨はく切く。ふ。ふ。ふ。花は紅白。花を葉のあり。紅白は種。  
 種あり。夏を大く。花を大く。七月種。花を大く。夏を大く。  
 まんち。ふ。ふ。ふ。人妻。花。夏の内。曝。花。ふ。ふ。ふ。種。ふ。ふ。ふ。  
 種。ふ。ふ。ふ。二月より。三月。月。蓋。を。結。ふ。ふ。ふ。種。ふ。ふ。ふ。  
 去。は。大。く。暖。力。の。又。石。竹。は。小。く。洗。汁。と。澆。ふ。ふ。又。富。上。



るどーたかゝるまでこゝろあまぬをよせよ

石竹本 真ふふり。江戸ふくま作七月種をまたる

人妻汁と焼しり

剪紅紗花本 真ふふ赤ふゆまらちり地ゆ。去種分

干編人妻汁と焼しり。舊根八年種付たるは。剪春羅又を

江戸のふの款皆同一。花鏡云剪春羅宜雞屎

藍菊花 花碧色紅白るとあり春彼岸種を毎秋花

人妻汁と焼しり。又秋府て種むる人妻汁

子妻ふ花咲あり

敗醬本 山の野又自生と花のまらる狐女郎花と云花の白きを

男郎花といふ種は思ふくあり。みふ細る茶又ハ本のまらる

胡枝子花救荒 月見草蕪塩 玉見草堀川院 とも云珠珠

又江白根あり。又木もたは幹身と枯てして樹の

一寸ゆもむらあり。招か八月一月はみ中人妻汁を焼しり

せんたふ子花 羊ふ二枚付きて夏のみふ似る。花はまらる

砂あむりの赤らあり。馬屎より編とまを焼しり

燕子花漳州 藏玉集より良吉草といへり。かきんを

書入候る。杜若ハ高良薑の一類なりて女ハ低く花白く



芙蓉あり。是を福高良薑とす。又花戸小く縮砂とす。此の縮砂又山薑の属也。是杜若の根也。根葉子花四七十月小葉を以て季と云。又白あり白くして雲垣の如き尾と云。紅くを著り紫を著るると云。花辦大なり。六枚ありと云。曬すに小葉を以て田の傍に植ると根を肥せ及むに花は小く植ると根を植ると干し纏むと云。又花莖葉浦も同じ。

蘭草 本 時云云ともはよ。多洗汁を洗へ花多し。人糞を以て用てよ。あや花種多し。以て常多し。葉と白又絞あり。又尾小あやめのみ入るなり。又俗小扇草花尾張園にてはあやめあやめと名く。葉ハ射于葉と云。小似く花はあやめと云。

蜀葵

蜀葵 本 種を腐く花の色多し。人糞あり。白花は紅花より多し。あや花は花を紅く見ゆればあり。又あやめと云。あや花は八月種をまれば多し。汁を清めればあや花を焼てよ。

蘭蕉

蘭蕉 農圃 六書 中圃へ人糞を入曝し壺壺に月種を腐へては

紫羅蘭花

紫羅蘭花 鏡 赤土或は云の肥地へ秋の彼岸小種をまれば灰人

日く草

日く草 本 西より来り今多し。之は月種は商人糞多し。種をまれば

草

草 種をまれば花を聞く。花は紅白の二種あり。



蘭花 蘭花

金盞花 草本

秋の彼岸小種を蒔き去或赤土のものより多洗汁

人御まじり焼

千日紅花

天和貞享年中小本邦へ初て傳へ今多し

真土赤土ともあり。二三月種を蒔き秋花あり。紅白二種あり。

多洗汁人屎等焼てす

幽蘭

秋蘭 事物 あり 秋花あり。又葉に斑ありのものを地軸

又まらんまらんといふ。又對馬國より青幹蘭紫幹蘭

新 筆あり。俗に雲蘭といふ多花あり。又漢より素真蘭と稱す

舶来あり。葉小蘭に似く花の形建蘭のごとく色純白にして其

綠色斑帯を香又愛さる。蘭中の奇品なり。又漳蘭ハ葉

種 小蘭ハ葉短く狭し。花の香氣を勝たり。又るぎ蘭ハ土佐國

紀伊國筆を産すと葉の幅七八分長さ三寸ありて形状竹節の多

ごとく花ハ蘭に似し。又球球より来る鳳蘭 あり俗に菅蒲

蘭といふ葉ハ建蘭に似し。軟く長さ二三尺十月花あり。又

雨の山中小種より報春先 あり葉ハ小蘭に似し。潤くま

園中人春蘭譜と名く。其外蘭の類多し。又蘭の類ハ

蘭の名あり。花ハ多し。惣て蘭と稱す法品あり。大凡赤土小

油糟干糞とせ入種す。花壇綱目に田螺生みて殻も小

大豆煮汁を筆で小合日毎に腐る。附殼を去る。其

葉ハ赤土小種より赤土小種より多し。又赤土小種より多し。

草休育種卷下

四十五



屎聚ハ虫一風口の虫孤形ノ溜テリ。蘭ハ井水ヲ忌中群芳  
潜小見也。常小日陰ニ動レ。八月抽葉多ク。盆の底ハ水ヲ  
少ク黄ハを粗碎トシ入ル。枝ノ末ニ然且とも霖雨のせ川ハ  
肉ハ入ベシ。冬ハ盆底入ル。花鏡曰。養蘭訣云。春不出。夏不日。  
秋不乾。冬不溼。

一 船棋 本草 小賦

善に狹と網と二種あり。善のせむきよく立ぬの  
る。又星ありもあり。善の溜ハ善の先垂るものる。是又同道あり。然  
あつと云はあまり肥まれば斑返るもの之肥を少く用てよ入を少く  
まじ。盆小抽ねハ斑之らず。善根の本又花を同秋実瓜結て形  
抽のどく中に実あり玉蜀黍の種亦似く。善小抽ねハよく生ず。

根ハ九月あり。根ハ黒く世々あり。下谷多あり。又赤あり  
漬の揚を切ませ抽て。肥ハ善の根中ノ人糞ヲ用。善を  
入て下。又油糟を解て漬レ。又月代の色を垂て。日陰ニ  
極日陽多バ。蘆簀を度々入。善根を抽て。よ入ふればバ  
とさめ人善あり。

万全青花鏡

種較多し。長島雲山大名晴鏡形多。於多し。又  
らんきんおゆハ幅三寸分長く。守りなり。花実あり。善に抽  
地ハ赤ハおゆをまかせ。極油糟漬のぬ米汁ある。漬て。陰休ハ  
穂一或ハ云たむハ毒あり。然れども。善瓜食を。人ハ好む。善  
の毒ハある。僕上もハ万事の種候。よハ万全。善と用て。











あしんがふり。さへはちあへ入るる。

紫金牛木

種多し。若くは世に竹林の下に植わよく

養茂る。秋小栽る。秋をよくして雨除の下陰地ふまへ

火蕉物理

後河安房等の暖地あて実を結と実と本草お

無漏子といふ樹入る。大根小葉。又招の候は

細して枝多し。俗小蘇鉄ハ鉄を好とて。打ふとを打ふ却て悪し。

実ハ鉄を好小あふと火を好る。鉄ハ火氣と管ている。火を好る

地ハ赤土砂をよむ。金栽る。赤土と砂等分ふ合

摺へ。若くは五。油糟夏ハ洗汁人糞汁を好く。ト

招中へ入て。陽地。乾を好湿地を好る。

海州骨碎補證類本草

日光山又木曾山中多し。種多し。時を

招大樹の招中へ入。木皮並小地。遠方の多し。又へ

付ともより。又け。鹿角菜。小て煉。善不任。形を

乾。石葛又。のぶ。狐。細き。刻竹。又。綱線。ふ。と。止

仙人掌嶺南雜記

又霸王樹。本暖國より。来。後河安房

薔薇の。実ハ母指の。大。中。小。仁。あり。肩。よ。く。生。ず。又



枝を折る。折る。灰を付さし日に乾て挿れ。よく活のなる。  
夏中人糞汁を澆べ。近江白埴あるものあり。又石下さかてんと  
之の。扁して枝少く。形状扇をむくごとく。或はさかてんの  
汁固ふ入る。耐ハ膏といふ。

龍骨木

桂海草

鎮火樹

鎮火樹といふ。暖國に多く。根挿て籬籬と  
する。此樹少を防。又盗と防。夏乾たる耐人糞を澆。十月

中。以よ。上。度。む。之。入。べ。夏の内枝を切。挿。治。の。之。

紅葉

藏玉集小

紅葉を挿。夏の内枝を挿。根先と切。秋小。冬よく  
深る。ゆ。此。多。て。紅。葉。影。ハ。五。月。以。山。中。み。の。所。人。よ。公。挿。ハ。く。

よく活のなる。切挿。ハ。ま。く。と。活。ど。又。挿。樹。の。影。ハ。活。く。

肥ふ及む

楸樹

收荒

構

構。か。ぐ。涼。山。之。常。盤。か。ぐ。て。その。か。で。年。  
種。数。多。一。三。月。五。月。以。よ。公。挿。小。と。是。石。か。で。敷。小。挿。一。紅。

葉。ハ。接。ぐ。紅。葉。と。か。え。ぐ。自。別。種。あり。又。葉。小。と。三。の。尖。

ある。孤。唐。楓。と。名。錯。り。楓。樹。ハ。利。存。る。漢。古。より。活。る。ま。さ。る。

あり。挿。を。ま。り。下。に。無。差。と。実。と。列。し。よ。よ。け。ま。ど。秋。ふ。ま。を。実。の。

大。さ。母。挿。の。如。し。と。園。に。植。水。栗。の。種。小。以。て。小。く。軟。刺。あり。あ。れ。

楓。種。多。り。耐。挿。く。せ。に。根。を。石。み。挿。ぐ。一。葉。大。掌。の。大。さ。と。

三。の。尖。あり。秋。よ。く。紅。葉。ハ。特。に。丹。楓。といふ。



以上百八十五品各々入の付節ハ國の空餘よりして小呂の  
か水すずは法不極くす。此書不洩るる品乃肉也。  
その物の性を考ふる難を察して是と合かんぐは書不載る果  
物ふおんくよく鍛煉其自禁然の草木の子入ハ其備不自然  
なるべし。功を積む其理と自なるべし。故にを一書不貫通とす  
こゝ老農み如るなり

草木育種卷之下 終

文化十五戊寅正月

發行

書林

京都寺町松原

勝村 治右衛門

大坂心齋橋北久太郎町

河内屋喜兵衛

江戸日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

同 日本橋通二町目

山城屋佐兵衛



